西周土器の編年研究

――豐鎬地区の土器――

飯島武次

一、はじめに

殷周時代の土器研究の中で、特に我国においてなじみの薄いのは、西周土器に関する研究である。今日に到るまで日本語で書かれた論文は一つも無いと言っても過言ではない。西周土器の研究は、蘇秉琦教授の一九三〇年代に於ける陝西省宝鶏市闘鶏台遺跡の調査、研究が草分けといえる。[1] その後一九五〇年代に行われた陝西省長安県の客省荘遺跡、張家坡遺跡の西周墓調査で出土した土器に対する編年研究は、西周土器編年の基礎となるものであった。[2]

闘鶏台遺跡は、陝西省宝鶏市の東七・五kmの渭河北東岸の台地上に位置している。同遺跡は一九三三～一九三七年に北平研究院史学研究所考古組によって、戴家溝の東側を中心に発掘が行われ、八二基の周～漢墓が調査された。八二基の墓の内四五基は西周、先周の墓であった。出土した鬲に対しての分類が行われ、先周、西周時代に関しては鬲足の分類によって、早期、中期と晩期の区分が行われた。すなわち錐足鬲（高領乳状袋足分襠鬲）の時期は早期で、折足鬲（連襠鬲類）の時期は中期、短足鬲の時期は晩期と認識された。早期の錐足鬲の年代は、今日の知識から見ると先周時期に中心が有ると考えられ、折足鬲の年代は西周時代に重なると考えられる。

一九五五年から一九五七年にかけて中国科学院考古研究所は、周文王が遷都した豐京の地と推定される陝西省長安県の灃西地区の客省荘、張家坡において考古調査を行った。豐京の地における初歩的な考古調査は、一九三三年、[3] 一九四三年にも行わ

れているが、[4] 本格的な発掘調査はこの一九五五～一九五七年の調査が最初である。この調査の結果、陝西省内における龍山文化である客省荘第Ⅱ期文化の存在が明かとなり、また、一八二基におよぶ西周墓が調査され、西周土器編年の基礎が確立された。この時に組立てられた西周土器編年は、第一～五期の五時期に細分されるものであった。その時代は、おおむね周第二代の成王から西周末年ないしは春秋初年にいたるものである。

西周文化の考古学研究に於いても、土器の編年研究は遺構の年代や伴出する遺物の年代を決定する上で、また社会、文化の認識の上で基本となるものである。西周時代に都の置かれた豐鎬地区出土の土器に関して、これまでの先学の研究を整理し編年を組み立ててみる。黄河の上、中、下流域及び長江の中、下流域の相当に広い地域から西周土器と称される遺物が発見されている。遺物の出土地域が広く、また未研究分野が広い場合、考古学的に重要なのは、まず第一次的にその時代の政治、文化の中心的地域出土の遺物に関しての研究を行い、その文化の基本的様相を掌握する事である。その意味において、西周文化研究においては豐鎬地区の土器研究が重要な意味を持ってくるのである。

二、豐鎬地区出土土器の研究

周の文王が都を置いたと言われる豐京の地は、陝西省長安県の灃河西岸の客省荘、張家坡を中心とした馬王村、大原村、馮村、曹家寨、西王村の一帯と推定されている。豐京の地を求めての本格的な調査は、先記したように一九五〇年代以降に開始されているが、一九五五年から一九五七年の調査によって、一八二基の西周墓が発掘され、そのうちの一二七基の墓から四一二点の副葬陶器が出土した。また一二七基の土器出土墓のうち六〇基の墓から出土した副葬陶器は複数の土器が組合わさった物であった。副葬陶器の器形には、鬲、鼎、簋、盆（盂）、豆、碗、盤、罐、壺、鋪など一〇種があった。土器の大多数は、実用の土器類で、煮沸痕の残る鬲も多く、長期の使用の後に副葬品に利用されたと考えられる土器も存在する。このほか小数

の土器は、焼成温度が低く、作りが雑で副葬用の明器として製造された物と考えられる土器も存在する。副葬陶器の器形、胎土、紋様は、この時代の住居址から出土する物と原則的に同じであるが、大きさは住居址出土の土器に比べ一般に小型である。

『灃西発掘報告』に於いては、土器の型式と組み合わせを根拠に分類を行い五時期に分けている。第一期の土器には、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式鬲、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式罐、Ⅰ式簋がある。墓によっては、壺や鎗が罐に変わる場合もあり、また碗や豆が加わる場合もある。第一期の土器の代表的な遺物には、一七八号墓、K一四五号墓出土の土器がある。第二期の土器には、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式鬲、Ⅴ・Ⅵ式罐、Ⅱ式簋がある。K六九号墓出土の土器がこの時期を代表する遺物である。第三期の土器には、Ⅳ・Ⅴ式鬲、Ⅴ・Ⅵ式罐、Ⅱ・Ⅲ式盆（盂）、Ⅱ式豆があり、一四九号墓、一五七号墓などの土器を代表例とする。第四期の土器には、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ式鬲、Ⅵ・Ⅹ式罐、Ⅲ式盆（盂）、Ⅲ式豆があり、四五三号墓出土の土器を代表例とする。第五期の土器には、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ式鬲、Ⅴ・Ⅵ式罐、Ⅲ式盆（盂）、Ⅳ式豆の器形が存在し、一四七号墓出土の土器を代表例とする。

『灃西発掘報告』は、上記の土器編年を図として示している。第一期の年代に関しては、M一七五墓出土の青銅鼎が〝大盂鼎〟に類似し、また同墓出土の青銅簋が〝禽簋〟に類似し、大盂鼎や禽簋が西周初年の成王、康王時代の遺物と考えられる点から、灃西の第一期を成王、康王時代に相当すると考えている。第二期の年代に関しては、第二期の土器が、長甶墓出土の土器や[5]、普渡村M二号墓（一九五四年発掘）の土器に類似し[6]、長甶墓の年代やM二号墓の年代が穆王時代に想定されるところから、灃西の第二期の年代は穆王及びその直後の年代に相当すると考えている。第三期の年代に関しは、第三期の終わりが上村嶺虢国墓の年代と同じ[7]、又は西周晩年から春秋時代の初頭と考えている。『灃西発掘報告』によれば灃西の第五期も西周の末年から春秋時代初頭であると言う。

このような五期の分類の外、一般に西周時代は、前期、中期、後期の三時期に分けられる事がある。前期は前一一世紀から前一〇世紀中葉までの年代に相当し、この時期の後半は、『灃西発掘報告』の第一期に当たり、成王、康王の時代である。中

期は、前一〇世紀中葉から前九世紀中葉で『灃西発掘報告』の第二期に当たり、穆王及び穆王にやや遅れる時代である。後期は、前九世中葉から前七世紀中葉までで、東周時代初頭も含まれ、『灃西発掘報告』の第三・四・五期に相当する。

灃西に於ける前期の土器は、灰陶が主であるが、磨研陶、紅陶、黒陶も存在する。紋様は縄紋の他、雷紋、S字紋、重圏紋などがある。土器器形の基本的な組み合わせは、鬲、罐、簋で豆が含まれる場合もある。鬲は先記したようにII・III・IV式があり、器身が太く、肩部は丸く張っている。簋は、先記したようにI式が有り、深腹、円底で、圏足は低く、縄紋が施されている。豆は、盤豆型で、皿がやや深く、圏足が太い。中期の土器も、やはり灰陶が主で、縄紋、雷紋、S字紋などが施されている。土器の組み合わせは、鬲、簋、罐、豆を基本としている。この時期の鬲には、先記したように、III・IV・V式の鬲あり、鬲の足は袋状であるが、内底は平に変化しだす。簋は、腹壁が直立し、口縁が開き、圏足は高く、S字紋や弦紋の施される物が一般的である。豆の皿は浅く、平底で、圏足は比較的低く、大きく開く。罐類は有肩・平底で、肩部に弦紋が施される物が多い。後期の土器の胎土の主体は灰陶で、紅陶は少ない。紋様の主体は縄紋で、画紋もある。この時期の土器の組み合わせは、鬲、豆、盆、罐で、前期、中期の簋に変わって、盆が一般化している。鬲には先記したように、IV・V・VI・VII式があり、脚が袋状の器形の他、実脚や平底に近い器形も見られる。盆には、II・III式があり、口縁部が鋭く外折し、肩部が張り、平底の物がおおい。豆には、II・III・IV式があり、皿が浅く、圏足が高くなり、圏足腰部には弦紋が施されている。罐には、IV・V・VI式があり、先記したとうり肩部が折れ、弦紋の施された遺物が多い。西周後期の土器は、灃河西岸の西周遺跡からの出土の他、河南省陝県上村嶺の虢国墓地からも多数出土している。(8)

一九五五～一九五七年の灃河西岸における発掘についで、灃河西岸における西周墓のまとまった発掘調査は、一九六七年の長安県張家坡遺跡の西周墓発掘である。一九六七年には、一二四基の西周墓が発掘されている。(9) 一二四基の西周墓の内、副葬品の出土した墓は一〇一基で、その中の六八基が特に保存状態が好かった。張長寿氏は、一〇一基の西周墓を副葬陶器の器形

と組み合わせによって六期に分類している。張長寿氏執筆の「一九六七年長安張家坡西周墓葬的発掘」によると、一九六七年の発掘墓の第一期は克殷前の豐京時代に、第二期は『灃西発掘報告』の第一期で西周初年から成王、康王の時代に、第三期は『灃西発掘報告』の第二期で穆王前後に、第四期は『灃西発掘報告』の第三期で懿王、孝王時代に、第五期は『灃西発掘報告』の第三・四期で厲王時代に、第六期は『灃西発掘報告』の第五期で宣王、幽王時代に相当するという。

張長寿氏が「一九六七年長安張家坡西周墓葬的発掘」の中に発表した編年は、一九六〇年代以降の豐鎬地区の西周発掘資料を利用し、その時点においては、高く評価されうるべきものであったが、高領乳状袋足分襠鬲の属する年代の名称を「西周初頭」の用語を用いるなど、今日の知識から考えると若干納得しかねる部分もある。高領乳状袋足分襠鬲の属する時代の名称は、やはり「先周」とすべきであろう。張長寿編年で、西周土器を六期に分けた事は、後述する理由によって合理的でもあると思われるが、六期に分けた理由が定かでない。また、各時期に西周の各王名を比定しているが、結論としてはよしとしても、その理由を明らかにしていない。

中国社会科学院考古研究所の李峰氏は西周青銅器の編年に関する論文を発表していられる。[10] その中で李峰氏は、西周青銅器を張長寿氏と同じ六期に編年し、あわせて青銅器と伴出する土器を紹介し、西周時代土器の六期編年も組み立てていられる。西周土器の年代を考える上での重要な手がかりは青銅器の年代で、その意味において李峰氏の論文は重要な意味を持っているが、取り扱った地域と遺跡が、周原、豐京、鎬京付近のかなり広い地域に及び、また孝王から共和に到る時代が曖昧で、重要な青銅器の年代観を何を根拠に決定しているのか、いささか不明の点がままある。[11]

筆者は、ここで西周青銅器に伴出する土器を中心に西周土器の編年を組み立ててみる。先記した二人と結論は極めて近いものであるが青銅器の年代観を利用して、土器の年代を明にしてみるつもりである。ただ残念ながら筆者は、西周金文に関しては素人であるため、金文から示された先学の青銅彝器に対しての年代観を積極的に批判する力を持たない。先学の青銅器の年代観を拠り所に土器編年を組み立ててみるつもりである。

三、豐鎬地区出土土器の編年

ここで取り扱う西周土器は、地域的に豐鎬地区出土の遺物に限り、また年代的には西周武王から幽王に到る時代の編年を試みたい。張長寿氏、李峰氏は西周土器、西周青銅器の編年においてこの時期を六時期に分けられた。両氏の六期編年はそれなりに理由があるが、筆者は西周文化を五時期七区分に分け土器編年を試みようと思う。以下に五時期に分ける理由をのべる。

克殷の年代つまり西周王朝の成立年代に関しては各種の説があり定かでないが、陳夢家はこの年を前一〇二七年とし、新城新蔵は前一〇六六年とし、董作賓は前一一一一年とするのを代表的な説とし、他にも多くの説がある。西周の末年に関してこれを前七七一年とするのが一般的で、この年に関しては多くの賛意が得られている。陳夢家の前一〇二七年説に従えば、西周王朝は二五六年間、一二王、一一世代続いた事になる。二五六年を五時期で割ると一期が平均で概ね五〇年（正確には五一・二年）になり、五時期区分の上で都合のよい年数となる。考古学的型式学の上で、五〇年以下の三〇年、二〇年単位の細分された編年は不可能とも考えられ、たとえば二〇年単位の編年が図面上では可能としても、考古学的な意味を持たず、単に後学の研究に混乱をもたらすだけである。その意味においても五〇年という数字は都合がよい。また董作賓の前一一一一年説に従えば、西周王朝の存在年間は三四〇年になる。しかし、筆者はかつて夏、殷、周三代の存続年間が間延びしていることを指摘した。[12] 西周に関しても、王一人一人の寿命をあまり長く考える事は、合理的でないと考えている。西周二五六年間、一二王、一一世代で、一人の王が平均約二三年在位したと推定するのがいいところで、西周三四〇年間、一二王、一一世代で、一人の王の平均在位年数を約三一年間とするのは人間の寿命との関係において長すぎると思う。従って陳夢家の説にしたがい、西周存続年数を比較的短く、二五〇年前後と考えておきたい。

次に、西周二五六年間あまりの中で、各王の在位年数が明かでないにしても、『史記』周本紀に従えば克殷後の武王の在位

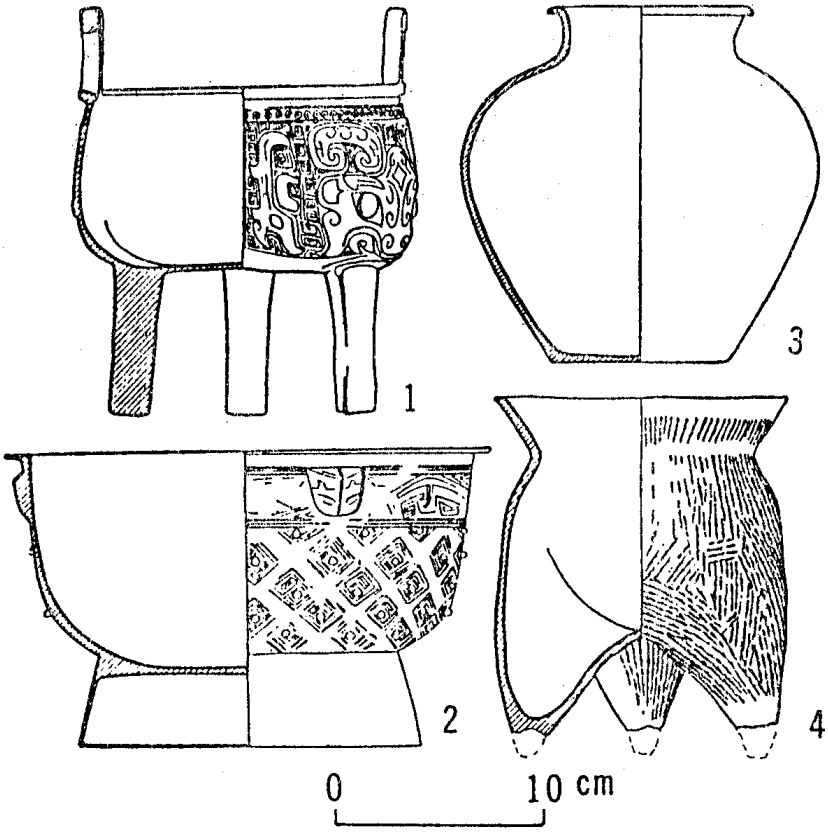
年数はわずか三年間で、また、『逸周書』に従えば克殷後の武王の在位年数は六年間で、この三年あるいは六年という年数は考古学的な土器編年に対応させる事は意味がないし、間違いを犯す。従って武王の即位後、他界までの年数は、それが一四・一五年間であるのか一八年間であるのか、さらに長いのか、短いのか不明ではあるが、武王時代の大部分は、文王に続く先周時代と認識するのが正しい。

従って考古学的に取り扱う土器の実年代は、武王の最末年を含むにしても、おおむね西周第二代の成王から第一二代の幽王の時代に到るものと考えて差し支えない。

張長寿氏は、張家坡遺跡発見の六七SCCM八九号墓を〝張家坡の西周早期〟[13]とされ、その時代を克殷前の豐京の時代と考える。しかし六七SCCM八九号墓の年代を克殷前と考えるのは正しいが、西周早期の名称は若干の誤解を生むので、明確に先周時代に含まれるとすべきである。六七SCCM八九号墓は、筆者の先周第四期に比定される。

六七SCCM八九号墓は、長方形竪穴墓で腰坑を有し、主体の被葬者の他、二層台上に殉葬者一体を埋葬している。副葬品は陶罐一点と高領乳状袋足分襠鬲一点であった。この高領乳状袋足分襠鬲は、陝西省扶風県の劉家遺跡の第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期に属するM一一号墓、M四六号墓、M三七号墓出土の高領乳状袋足分襠に近い。[14] また長安県灃西の客省荘遺跡八三SCKM一号墓や張家坡八三灃毛M一号墓から出土した高領乳状袋足分襠鬲の器形に類似している。

客省荘八三SCKM一号墓と張家坡灃毛M一号墓の年代については、「先周文化陶器の研究……劉家遺跡出土の陶器の検討」において詳しく述べたので、ここではその結論のみを紹介しておく。[15] 八三SCKM一号墓出土の二点の青銅戈は、殷墟遺跡四盤磨村発見のSPM八号墓から出土した青銅戈に極めて類似し、SPM八号墓の青銅戈の年代は殷墟文化の第三期に属すると考えられている。従って、八三SCKM一号墓の年代も殷墟第三期に併存すると考えられる。灃毛M一号墓は、この墓から出土した青銅鼎と方格乳釘紋簋が殷墟文化第四期に属する遺物と考えられ、従って灃毛M一号墓も殷墟第四期に併存すると考えられている。以上から八三SCKM一号墓と灃毛M一号墓そして六七SCCM八九号墓出土の高領乳状袋足分襠鬲は、殷



第1図　土器・青銅器　張家坡M54号墓出土（第一期前半）

墟第三・四期に併存するものと推定される。これらの高領乳状袋足分襠鬲は、文王、武王の先周時代の遺物と推定され、西周時代の土器の範囲から外すべきものと考えている。

西周土器として最も古くなる時期の土器を探してみよう。西周最古の土器は、先記した理由によって、第二代の成王時代を中心とした時代の遺物であるべきで、第一代の武王時代の遺物多くのは、先周時代に含まれると考えている。成王時期の西周墓として候補に登る一つは、長安県張家坡遺跡の六七SCCM五四号墓である。[16] この墓は長方形竪穴墓で、腰坑を有し、主体の被葬者の他、二層台上に二体の遺体が殉葬されている。副葬品は陶鬲一、陶罐一、青銅鼎一、青銅簋一、青銅戈一であった（第一図）。陶鬲は分襠鬲で、袋足が太く高く、口縁は大きく〝く〟の字状に外反する。陶罐は口径が大きく平底で、肩部は丸く張っている。M五四号墓の副葬品の組み合わせは、張家坡八三灃毛M一号墓の副葬品組み合わせと基本的に同じである。

六七SCCM五四号墓の青銅鼎（五四：二）は鬲鼎の類に属し、口径一六～一六・五cm、高さ二〇・八cmの大きさで、内壁に図象記号（族象・族徽銘）が見られる。口縁部下には円圏紋が一周し、腹部には脚方向を中心に三組の饕餮紋が施され、饕

饕紋の両側には夔紋が施される。この青銅鼎に類似する遺物としては、陝西省岐山県賀家村遺跡出土の鬲鼎などが知られ[17]、林巳奈夫氏は、この鬲鼎を〝西周ＩＡ〟としていられる[18]。鬲鼎は、漠然とした意味の殷末、西周初期に多くみられる器形であるが、その絶対年代、実年代に関しては不明の点が多い。容庚の『商周彝器通考』においては、掲載した六点統べての鬲鼎を西周前期としている[19]。また、陳夢家の『美帝国主義劫掠的我国殷周銅器集録』では、収録した二七点の鬲鼎の内、二四点を殷、二点を西周初期、一点を殷、西周初期としている[20]。この種の鬲鼎の年代に関しては、正直なところ、殷末周初と言うほか、決定的な決め手が無いのかもしれない。張家坡八三灃毛Ｍ一号墓の青銅鼎（Ｍ一：一）の年代が、安陽市の后岡遺跡一〇号殉殺坑出土の戍嗣子鼎の年代に併存すると仮定すると、この時期は殷墟第四期に当たる。副葬品の組み合わせは、張家坡八三灃毛一号墓と六七ＳＣＣＭ五四号墓は同じであるが、この両者の間には、前者が早く後者が遅いという若干の時間的差が有ると考えられる。このように考えると、六七ＳＣＣＭ五四号墓の青銅鼎（五四：二）の年代は、西周前期の遺物である可能性が高くなってくる。

陳夢家は、『西周銅器断代（一）』において〝旅鼎〟なる青銅鬲鼎を成王時代の遺物としておられる[21]。旅鼎は三足方向に羊角形の饕餮紋を有し、六行三四字の銘文が存在する。陳夢家は、銘文中の〝大保〟を周公の子・明公と解釈し、この鬲鼎を成王時代に比定している。六七ＳＣＣＭ五四号墓の鬲鼎の器形は、旅鼎の器形に比較的近い。Ｍ五四号墓出土の陶鬲、陶罐の年代を成王時代に求めることが出来るかもしれない。

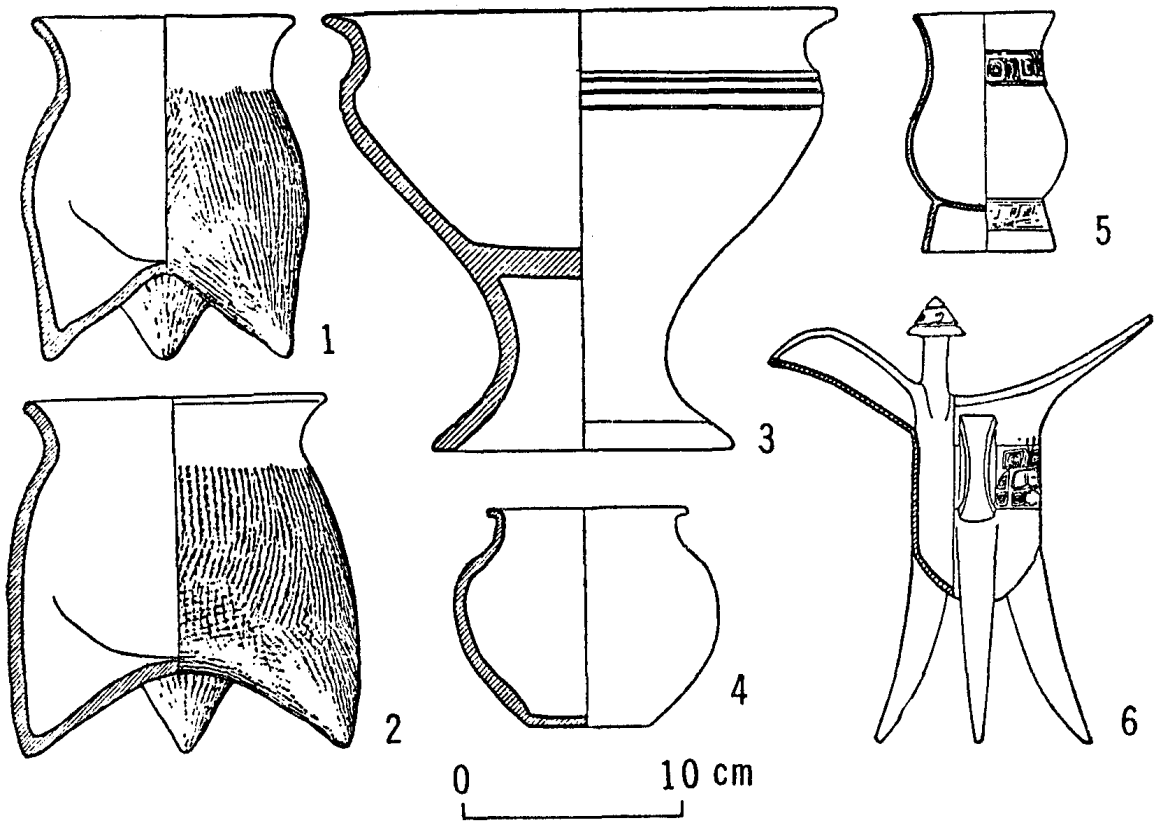
六七ＳＣＣＭ五四号墓出土の青銅簋（五四：一）は、武者章氏によって斜方格乳釘夔龍紋簋と呼ばれている青銅器である[22]。器身の壁は直立し、口縁は直角に外折し、圏足がつく。頸部には、獣面を中心に夔龍紋が施された三組の紋様帯が存在する。腹部には方格乳釘紋が施され、圏足の夔龍紋は明確でない。口径二四cm、高さ一五・二cmの大きである。この種の斜方格乳釘夔龍紋簋は、周原及び豊京地区から多く発見されている。斜方格乳釘夔龍紋簋は、年代的に殷後期、先周文化期、殷末周初期、西周初期の用語で表現され、圧倒的多数が西周初期の遺物と考えられてきた[23]。しかし、武者章氏は、斜方格乳釘夔龍紋簋

の中心的年代が、殷墟文化第四期に併存する先周文化期に有ると考えていられている。

六七SCCM五四号墓出土の斜方格乳釘夔龍紋簋に類似した青銅器には、同じ灃西の馬王村遺跡の西周墓から出土した青銅簋があり、口径二四・八cm、高さ一六・六cmでM五四号墓出土の簋の大きさに近い。[24] また同じ馬王村遺跡の西周墓から出土した青銅鬲鼎もM五四号墓出土の鬲鼎に類似し、大きさもほとんど同じである。確かにこれらの斜方格乳釘夔龍紋簋や鬲鼎は殷後期の要素を有し、その一部は先周時代の終わりに併存すると推定されるが、また、その一部は従来言われてきたように西周初期の遺物と見るのが妥当である。このことによって、先周文化第四期（劉家第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期）と『灃西発掘報告』の第Ⅰ期の間を連続させる事が可能になってくる。

以上のM五四号墓出土の青銅鬲鼎、青銅斜方格乳釘夔龍紋簋に対する検討から、M五四号墓出土の陶罐、鬲の年代を筆者の西周第一期前半と考えたい。実年代に関しては、決定的な手がかりに欠けるが、〝旅鼎〟の年代観などから西周の最も早い時期に相当すると推定され、武王時代の最末期に接触し、大部分は成王時代の前半に当たると推定される。

この時期（西周第一期前半）の他の西周墓には、六七SCCM一六号墓がある。[25] この墓は長方形の竪穴土壙墓で、腰坑はない。陶鬲二点、陶簋一点、陶罐一点、青銅爵一点、青銅觶一点、青銅戈一点が副葬品として発見されている（第二図）。陶鬲は、口縁の高い分襠鬲と口縁の低い連襠鬲で、腹部から脚部にかけて縄紋が施されている。陶簋は、器身が盆形で、肩部に弦紋が施され、圏足は器身に比べ比較的小さい。陶罐は、小型で口径が大きく、口縁が直角に外折する。M一六号墓から出土した青銅爵・觶の組み合わせは、殷後期の副葬品によく見られる組み合わせで、西周初期の墓の副葬品中にも見られる組み合わせである。六七SCCM一六号墓の青銅爵は二本の傘形の柱を有する典型的な殷末西周初期の遺物である。青銅觶は西周初期の遺物と見られ、青銅爵と觶の年代を総合的に考えると、西周初頭との結論が出てくる。従って六七SCCM一六号墓出土の陶鬲・陶簋・陶罐の年代も西周初期に属すると考えられ、西周第一期の遺物と結論づけたい。なお李峰氏は、張家坡の六七SCCM一六号墓出土の土器をもって、この時期の土器の代表としていられる。[26]

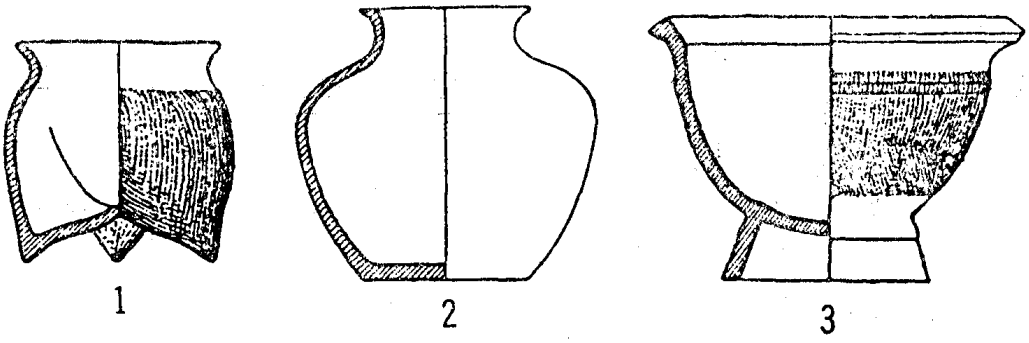


第2図 土器・青銅器　張家坡M16号墓出土（第一期前半）

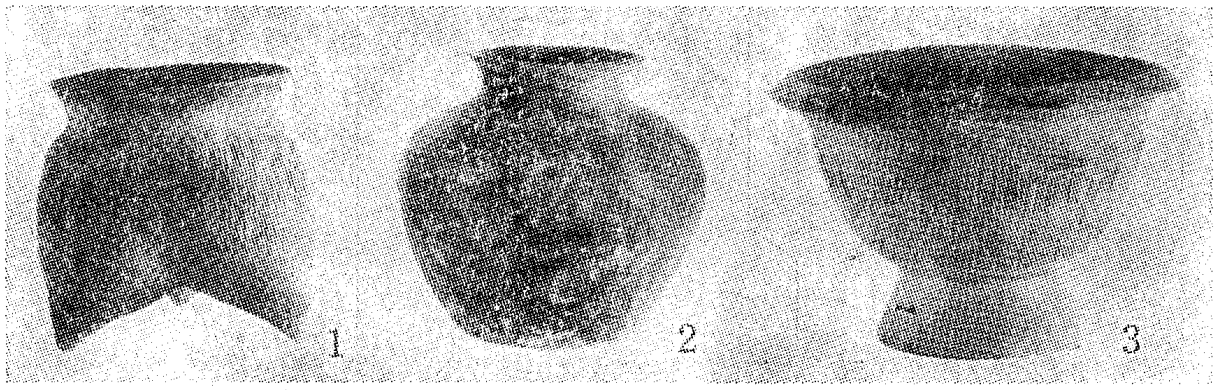
張家坡の六七SCCM八七号墓は、多数の青銅器を出土した西周墓で西周第一期と考えられる墓であるが、この墓からも一点の分襠の陶鬲が出土している。[27] M八七号墓は、長さ三・五m、幅一・九mの長方形竪穴墓で、腰坑を有し、陶鬲一点、青銅の鼎二点、簋一点、爵二点、觚一点、尊一点、卣一点のほか、青銅の斗、戈、矛、斧、錛、鑿が出土している。卣（八七：四）、尊（八七：五）には、〝擧〟形族徽記号が施されている。ここでは〝擧〟の年代的考証に深く入らないが一般論として殷末、西周初期の目安となる遺物としておきたい。[28] 従ってM八七号墓出土の陶鬲の時代も殷末あるいは西周の最も早い時期と考えて好いわけであるが、M五四号墓、M一六号墓出土の西周鬲と比較することによって、このM八七号墓出土の陶鬲も西周第一期の遺物としたい。

この時期の豐京地区、周原地区発見土器の器形には、鬲、罐、簋があり、この三つが西周第一期の土器の組み合わせの基本と考えられる。先周時期にほとんど見られなかった〝簋〟の器形が出現することが一つの特色である。このほか作りの雑な豆が存在するが、青銅器との伴出例がない。

西周第一期前半の次にくる西周第一期後半も、『灃西発掘報



第3図　土器　張家坡M 178号墓出土（第一期後半）

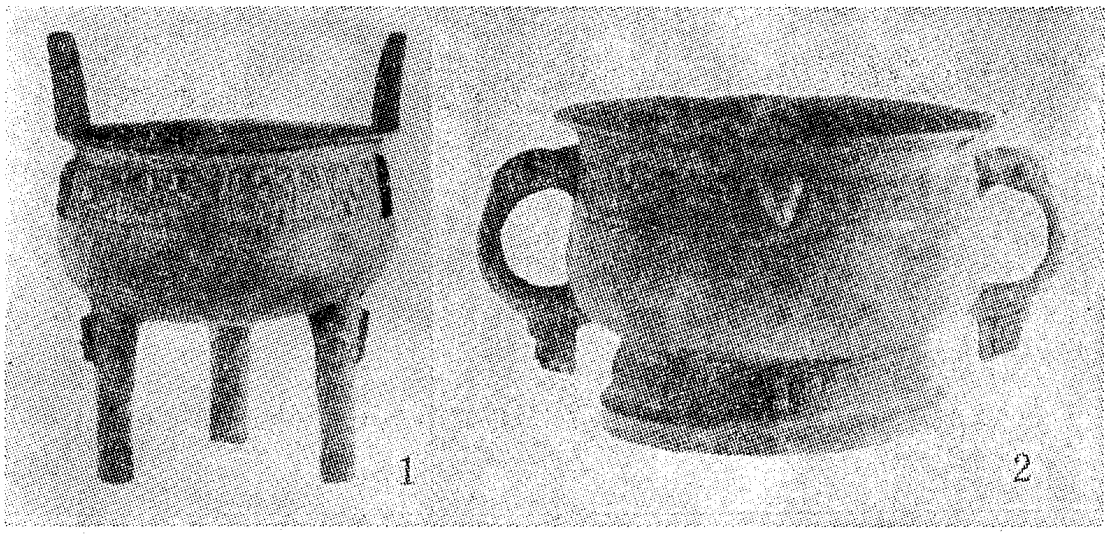


第4図　土器　張家坡M 178号墓出土（第一期後半）

告』のI期に含まれる時代である。『灃西発掘報告』の張家坡M一七八号墓がこの時期の代表となる。この西周墓は、腰坑を有する長方形の竪穴墓で木棺、木槨を有していたと推定され、南北長三・三二m、東西幅一・七mの大きさである。墓壙は南北方向に長軸を有し、木槨の南外に副葬品の青銅器と土器がまとまっておかれていた。M一七八号墓の副葬品には、陶鬲一点、陶簋一点、陶罐一点、青銅鼎一点、青銅簋一点、青銅蓋（鏡？）一点、青銅戈二点、他があった。

M一七八号墓の陶鬲は、口縁の低い分襠鬲で器身全体に縄紋が施される。陶簋の器形は典型的な西周時代の陶簋の器形で、口縁が外折し、圏足を有し、器身に縄紋が施される。陶罐は、大口で、底部の径も大きく、肩部が張る（第三・四図）。

M一七八号墓出土の青銅鼎（一七八：四）は、大口、鼓腹で、円柱形の三足と両耳を有し、口縁下に饕餮紋が施されている（第五図の一）。通高二六・五cm、口径二〇cmである。林巳奈夫氏は、この青銅鼎を〝西周IB〟とされ[29]、殷後期IIIBより新しく西周IIBより古いものとされてい



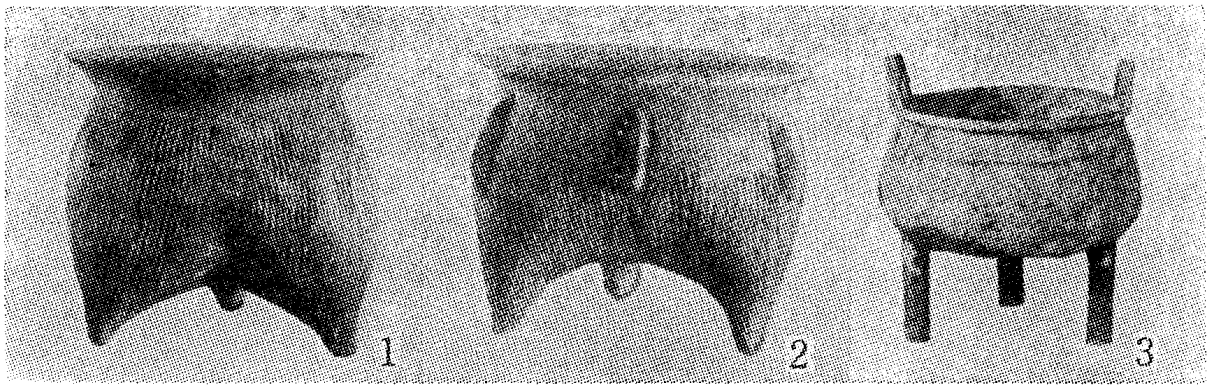
第5図　青銅器　張家坡M 178号墓出土（第一期後半）

る。西周前期のある時期との見解と思われるが、実年代に近い年代は示されていない。『灃西発掘報告』では、この青銅器に関して作りは薄く、威風は無いが、器形と紋様が大盂鼎に近いと述べ、康王の時代を考えている。

M一七八号墓出土の青銅簋は、口縁が開き、腰部が張り、圈足と大きな両耳を有する（第五図の二）。口縁下と圈足には饕餮紋が一周し、両耳には獣形の飾がつく。口径一八・七cm、高さ一三cmの大きさである。『灃西発掘報告』では、この青銅簋を禽簋に類似すると述べ、成王時代に比定している。陳夢家は禽簋を〝成王銅器〟の標準としている。[30] その点を良としても、M一七八号墓出土の青銅簋は、若干の伝世時間を有し、康王時代まで下る可能性は高く、また口唇部が薄く、禽簋の丸い口唇部とは異る点をも指摘できる。

M一七八号墓出土の青銅鼎、青銅簋の年代から、M一七八号墓出土の土器類・鬲、簋、罐の年代を考えると成王時代よりは若干年代の下がった康王時代の遺物との結論に達した方が合理的で、筆者はこの時期を西周第一期後半としたい。李峰氏は、この時期の西周墓として六〇M一〇一号墓を上げていられる。[31] 六〇M一〇一号墓は長方形竪穴墓で、陶鬲一点、簋一点、壺一点、罐三点と、青銅鼎一点、簋一点の副葬品が出土している。残念ながら報告書の土器の図が小さく標準遺物としにくいが、青銅鼎と青銅簋はこの時期の遺物である。また灃西六一M四〇四号墓などもこの時期の西周墓と考えられる。[32]

西周第一期前半・後半を併せて、筆者は西周第一期を成王・康王に比定し、そ

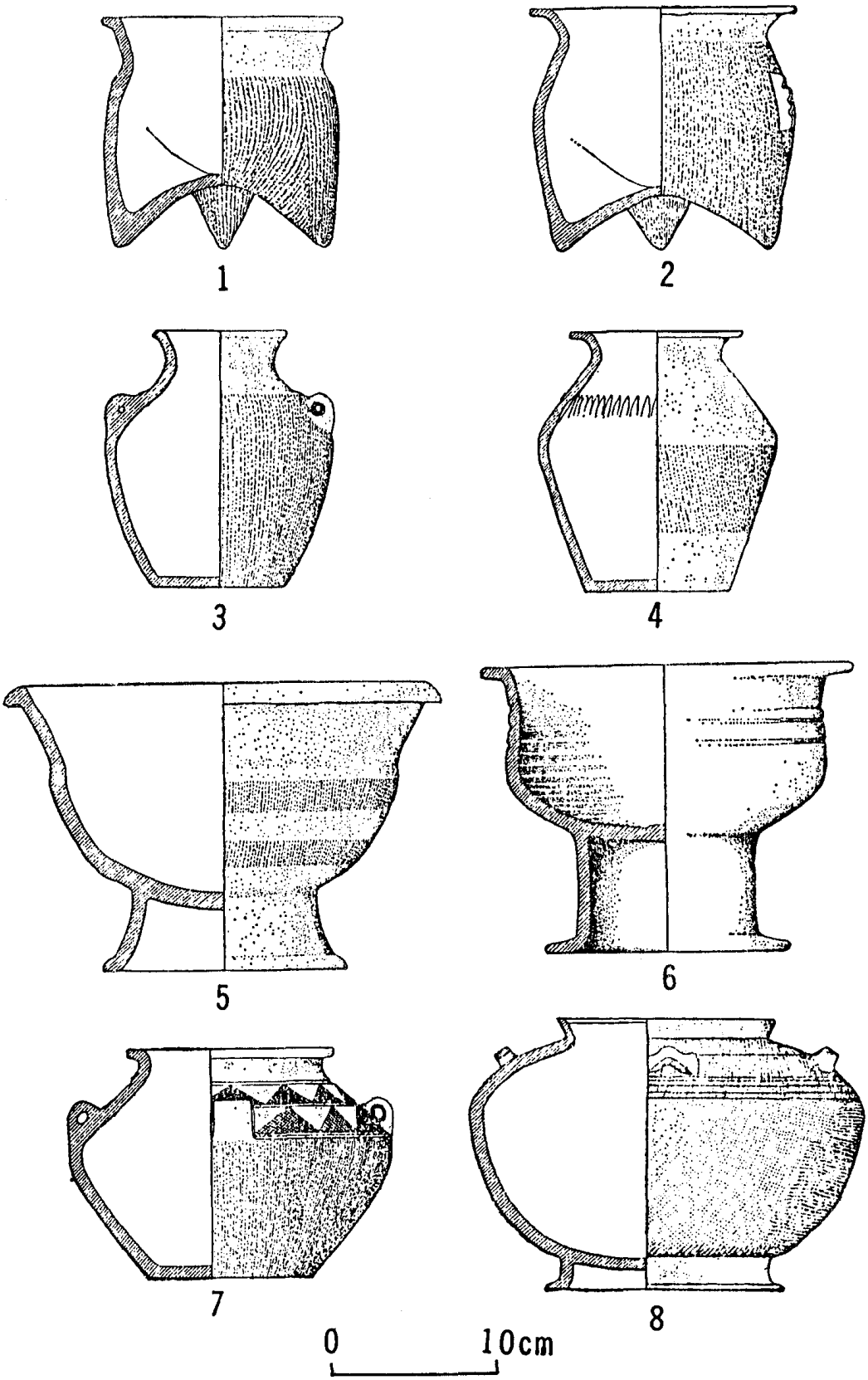


第6図　陶鬲、青銅鼎　張家坡57M162号墓出土（第二期前半）

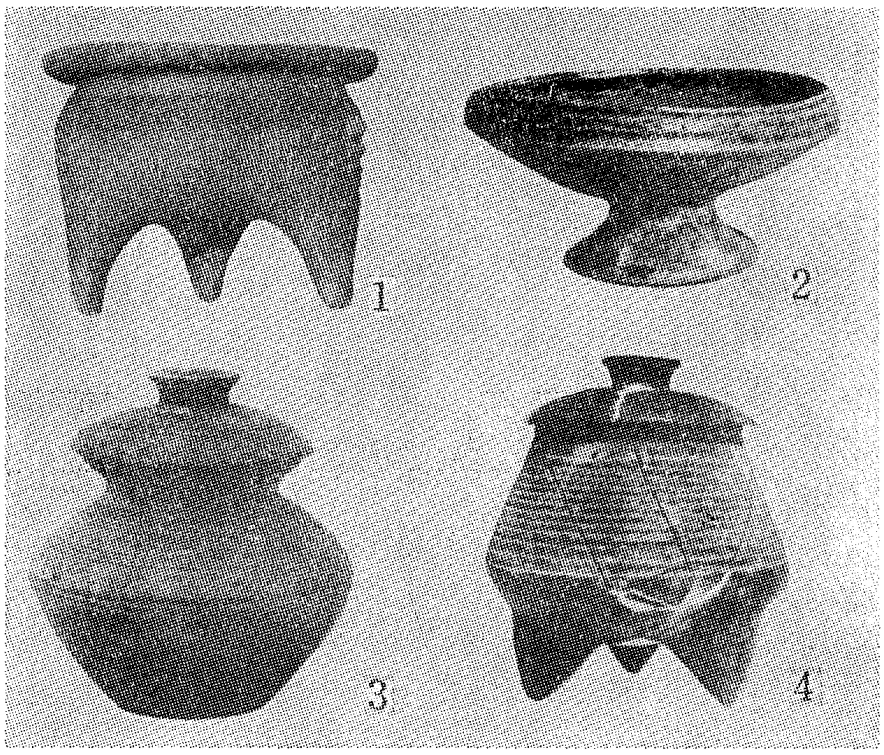
こに約六〇年間を想定してみた。

第一期に続く時代の良好な資料は少ない。この時期は、灃西張家坡の五七M一六二号墓の青銅鼎と陶鬲をもって基準とし、筆者は西周第二期と呼ぶ。[33] M一六二号墓は、長さ三・二m、幅一・五mの長方形竪穴墓で腰坑を有し、二層台上に一体の殉葬者が存在し、陶鬲二点、青銅鼎一点、戈一点、その他の副葬品が発見されている（第六図）。二点の陶鬲は、『灃西発掘報告』においてⅣ式及びⅤ式と呼ばれている型式である。Ⅳ式は、灃西における西周陶鬲の中で最も数が多い、分襠形、短足の器形である。Ⅴ式は青銅鬲の仿銅器で、短い円柱形の実足と三つの凸稜を有している。M一六二号墓出土の青銅鼎は、大きさが高さ一六・七cm、口径一四・五cmで、素面であるが、口縁下に弦紋が一周し、器身下部が膨らむ。類似した器形の青銅鼎には、害鼎があり、金文の上からは西周の昭王直後の器と考える説が存在するが、[34] 考古学的には昭王期の青銅器と考えたい。

五七M一六二号墓以外この墓と同時期の好資料が、灃西地区においてはまだ発見されていない。しかし陝西省内のこの時期の西周墓で青銅器と土器を伴出している墓には、扶風県の雲塘遺跡発見のM一〇、M一三、M二〇号墓などがある。[35] いずれも長方形竪穴墓で、木棺、木槨を有していたと推定される。雲塘M一〇号墓からは、陶鬲六点、罐八点、簋四点と、青銅鼎一点、尊一点、爵一点、觶一点、筒形飾一点などの副葬品が出土している。M一三号墓からは、陶鬲四点、罐六点、簋四点と、青銅鼎一点、鬲一点、尊一点、卣一点、爵二点、觶一点などの副葬品が出土している。M二〇号墓からは、陶鬲四点、罐四点、瓿二点と、青銅鼎一点、鬲一点、尊一点、卣一点、爵二点、簋二点、戈一点などの副葬品が出土している。



第7図　土器　扶風県雲塘遺跡出土（第二期前半）



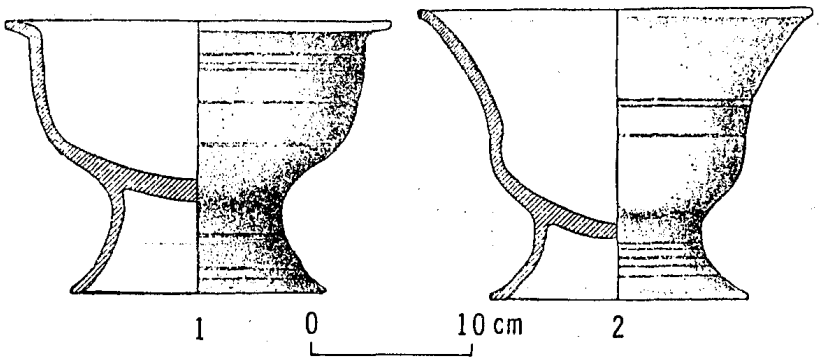
第8図　土器　普渡村長田墓出土（第二期後半）

M一三号墓出土の弦紋鼎（M一三：一三）は、害鼎や五七M一六二号墓の青銅鼎に類似する器形であった。M一三号墓出土の青銅卣（M一三：二二）は、鼓腹で圏足を有し、腹部は素面、無紋であるが頸部には二帯の細雷紋が認められる。通高二四・二cmの大きさで、腹底に三行八字の銘文が認められ、底部裏面には亀紋が存在する。この青銅卣（M一三：二二）の器形は、一説に昭王の一九年とされる作冊睘卣に極めて類似している。[36] M一三号墓出土の青銅鬲（M一三：一七）も、青銅鼎（M一三：一三）や青銅卣（M一三：二二）の作風に極めて類似している。この種の青銅器をもって昭王時代の遺物と推定するのなら、第七図に示した雲塘遺跡出土の土器は昭王時代の遺物と結論づけられ、先記したように筆者はこの時期を西周第二期と呼び、第二期の前半に当たると推定している（第七図）。

一九五四年に長安県普渡村で発掘された長田墓、[37] 及び長田墓と同類の青銅器を出土した普渡村第二号墓が、[38] 西周第五代の王・穆王時代の標準資料となる。長田墓は、南北長さ四・二m、東西二・五二m、深さ三・五六mの長方形竪穴木槨墓である。腰坑を有し、槨室の南側に青銅器を中心とした副葬品が納められていた。調査以前に農民によって荒らされたが、しかし、副葬品は多く、青銅器二七点、土器二三点、玉器二三点、石器一点、骨飾二点、子安貝五六点、貝一〇七点、貝飾一五八点、合計四〇〇点近くの副葬品が発見されている。発見された土器には、盆一点、瓿九点、豆四点、鬲六点、帯蓋三足器二点があった。三足有蓋の青銅盉には、六行、五七字の銘文があり、〝……穆王在……穆王

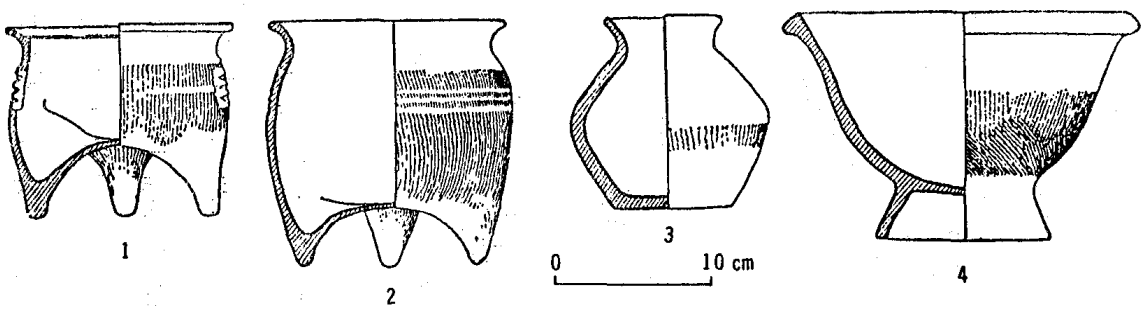
饗醴……長田……〃の銘文が認められ、穆王時代の青銅盉と考えられている。ほかに、青銅簋蓋の内側と簋底部にも〃長田作寶尊敦〃の六字が認められる。長田盉の時代を基準として、伴出した土器を穆王時代の遺物と結論づけることが出来るが、残念ながら写真を示して報告されている土器は、豆、鬲、瓿、帯蓋三足器だけである（第八図）。普渡村M二号墓出土の二点の陶簋も穆王時代の遺物と考えてよいであろう（第九図）。この穆王時代もやはり昭王時代に続く西周第二期に含まれ、第二期の後半と考えている。

この第二期は、『灃西発掘報告』の第Ⅱ期に当たる時期でもある。『灃西発掘報告』ではKM六九号墓を代表例として編年表に載せているが、KM六九号墓からは、鬲二点、簋一点、豆二点、罐一点の副葬陶器が出土している。また、この時期の青銅器を模倣した仿製陶器を出土した五七M二二二号墓もこの時期としている。残念ながら『灃西発掘報告』に報告されたこの時期の西周墓からは、青銅器の出土はないが、穆王時代前後に当たるとしている。張長寿氏の編年では第Ⅲ期にあたる。張長寿氏は、六七SCCM五六号墓出土の土器を標準資料に引用され、鬲、簋、罐の組み合わせが基本であると指摘され、穆王時代前後と述べていられる（第一〇図）[39]。概ね筆者の西周第二期の後半に当たると考えてよいであろう。



第9図　土器　普渡村M２号墓出土（第二期後半）

第二期に続く時期つまり第三期に比定すべき好資料が、豐京、鎬京に見あたらない。距離的にいささか西に寄るが、扶風県上康村のM二号墓がこの時期の基準となる[40]。上康村M二号墓は、長方形竪穴墓で、長さ三・三m、幅二・一六m、深さ一・六八mの大きさで、犬の納められた腰坑を有している。青銅器としては簋二点、鼎二点、魚形器、土器としては鬲二点、豆一点、罐三点が発見され（第一一図）、ほかに玉器、石器、貝器とうの副葬品が出土している。報告に写真の示された鬲は連襠鬲で、口縁が直角に近く外折し、鬲足の先端は平である。豆の

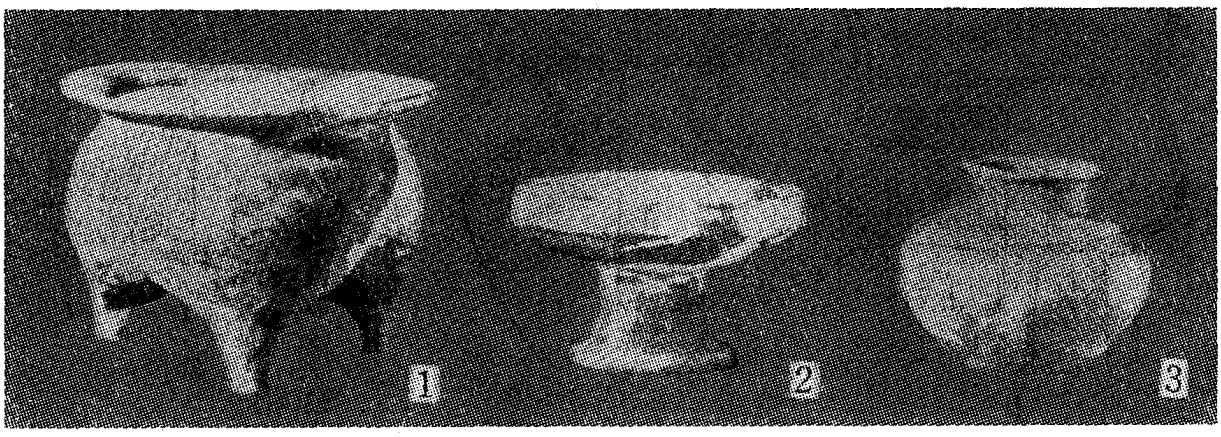


第10図　土器　張家坡ＳＣＣM56号墓出土（第二期後半）

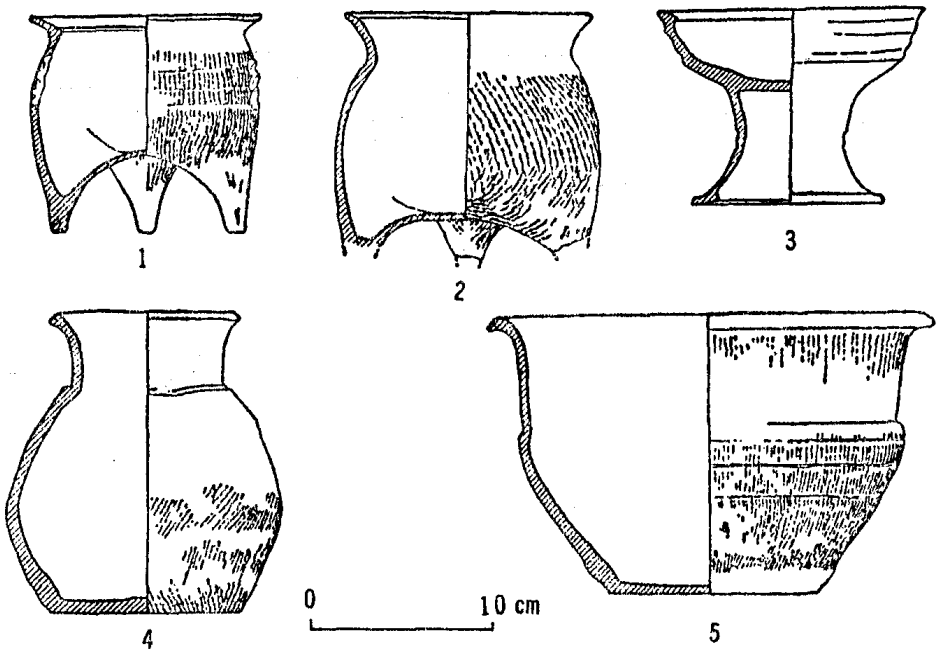
器身は盤形を呈し、口縁は直立している。写真の示された罐は鼓腹で、肩部が張り、口縁は直立し口唇部は外折する。上康村M二号墓から出土した青銅器を、李峰氏は、懿王、孝王時期の遺物と考えられていられるが、これは概ね、張長寿氏編年の第Ⅳ期に当たる。

上康村M二号墓出土の青銅鼎は、通高二〇・三cm、口径二〇cmで、腹部に夔龍紋が一周し、底部が比較的平で下腹部が膨らみを持っている。この青銅鼎は、上海博物館蔵の十五年趞曹鼎の器形に類似し、陳夢家はこの十五年趞曹鼎を共王時代の青銅器と考えている。筆者は上康村M二号墓の時期を共王、懿王、孝王の約四〇年間に比定し、西周第三期と呼びたい。上康村M二号墓の遺物の他、張長寿氏が引用した六七ＳＣＣM五七号墓なども第三期の標準となる（第一二図）。

『灃西発掘報告』の第Ⅲ・Ⅳ期は、張長寿氏の第Ⅴ期に当たる時期でもあるが、この時期を筆者は、西周第四期としたい。この時期の標準遺物としては、長安県新旺村のM一〇四号墓出土の青銅器と土器を基準にしたい（第一三図）[41]。この西周墓は、木棺、木槨を有する長方形竪穴墓で、陶罐一点、陶豆一点、陶盂三点、青銅鼎一点、多数の貝などの副葬品が発見されている。報告には、青銅鼎の写真と陶罐の図しか示されていないので、第四期の基準にしにくいが、ほかに銅器と土器が伴出している好例がない。M一〇四号墓出土の青銅鼎は、口が広く、器身が浅い平底で、軽く外反する対の把手が付く。口縁部下には三角雷紋と円渦紋が一周する。M一〇四号墓出土の陶罐は、肩部が張り平底である。肩部に重なる弦紋が施される。M一〇四号墓出土の青銅鼎を李峰氏は宣王・幽王期の遺物と見ていられるが積極的な根拠はない。むしろこの青銅鼎が張長寿氏が厲王前後とされる張家坡六七ＳＣＣM一〇三号墓の青銅鼎に類似する事に注意したい。新旺村のM一〇五墓から陶鬲が出土しているが（第一三図の三）、この陶鬲に類似した陶鬲が張家坡



第11図　土器　扶風県上康村出土（第三期）

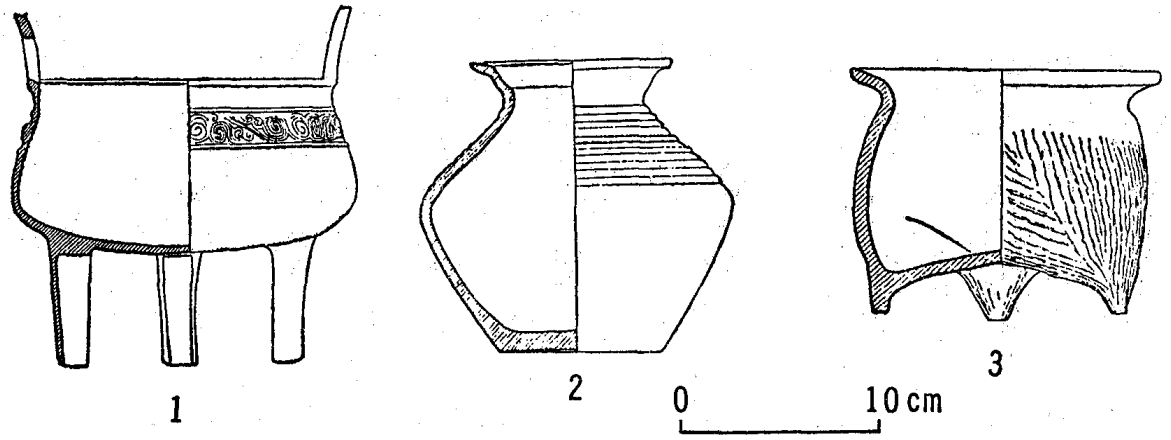


第12図　土器　張家坡ＳＣＣＭ57号墓出土（第三期）

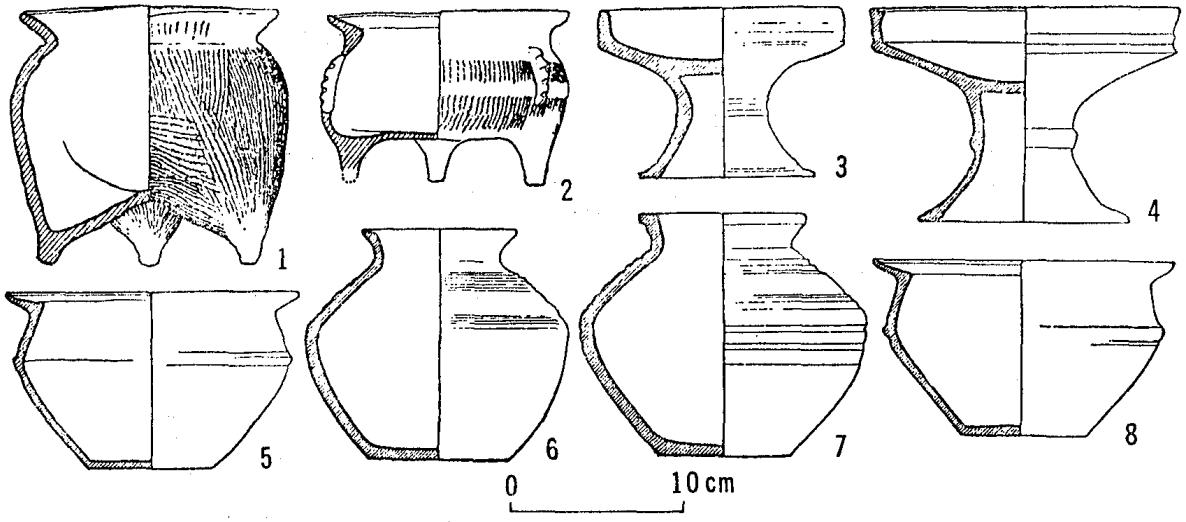
六七ＳＣＣＭ一六〇号墓からも出土し、張長寿氏はこのＭ一六〇号墓を厲王前後の、この時期の代表例に上げている（第一四）。筆者もこのＭ一六〇号墓出土の土器を西周第四期の標準遺物とし、夷王、厲王、共和の約六〇年間にこの時期を比定したい。

第四期の土器の特色を表すのは、第一三図の三と第一四図の一・二に示した鬲の器形である。鬲足の先端が平らな物と、鬲底が平底で鬲足の先端がやはり平らな遺物がある。

第四期に続く次の時期つまり第五期に関しても好資料が無い。この時期の青銅器と土器としては、張家坡六七ＳＣＣＭ一一五号墓の青銅鼎、盂と、陶鬲がある（第一五図）。この青銅鼎は、器身が半球状で、口縁部に二条の弦紋を有し、西周末の形を呈している。この青銅鼎は陝西



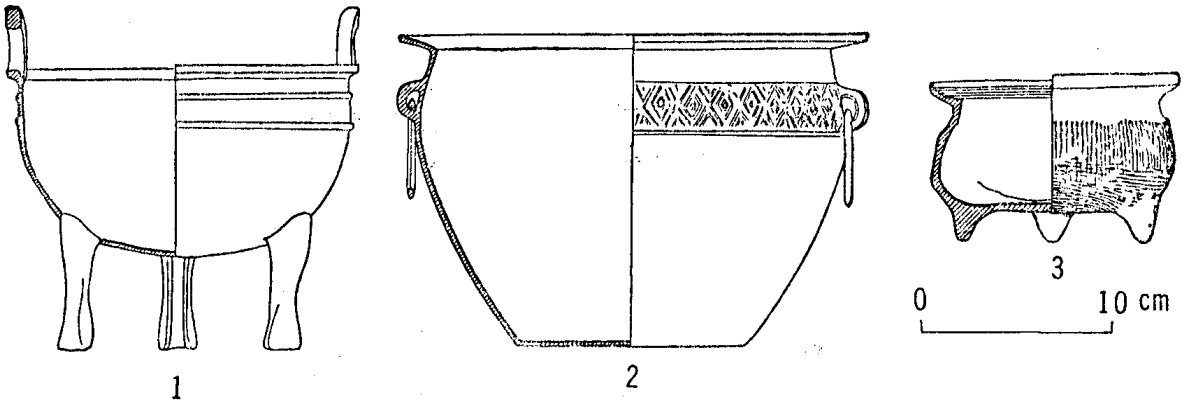
第13図　青銅器・土器　長安県新旺村出土（第四期）



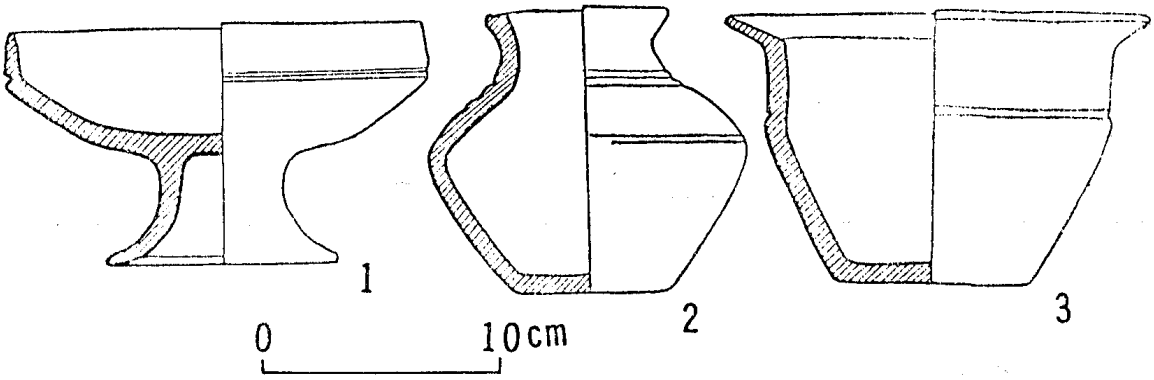
第14図　土器　張家坡67ＳＣＣM160号墓出土（第四期）

省出土と言われる青銅弦紋鼎（此鼎甲・丙）に類似し[42]、器身が此鼎甲・丙よりは若干深いが同一時期の遺物と考えたい。此鼎甲・丙は宣王時期の遺物と考えられているが、六七ＳＣＣＭ一一五号墓の青銅鼎も同一時期と考えて好いであろう。またＭ一一五号墓出土の青銅盂（第一五図の二）は春秋時代の鑑に近い器形である。ただし張長寿・李峰氏らは六七ＳＣＣＭ一一五墓の時期をそれぞれの第Ｖ期とされ厲王前後とされている、筆者とは見解が異る。

第五期を土器の面から捉えれば、張家坡の五七Ｍ一四七号墓や六七ＳＣＣＭ一〇六号墓（第一六図）、六七ＳＣＣＭ一〇八号墓の土器が標準となり、これは『灃西発掘報告』の第Ｖ期に当たり、張長寿氏編年の第Ⅵ期でもある。筆者は、この時期を西周第五期と呼び、宣王、幽王の約六〇年間足らずを考えているが、西周第五期の最後は、地域的には離れる



第15図　青銅器・土器　張家坡67ＳＣＣM115号墓出土（第五期）



第16図　土器　張家坡67ＳＣＣM106号墓出土（第五期）

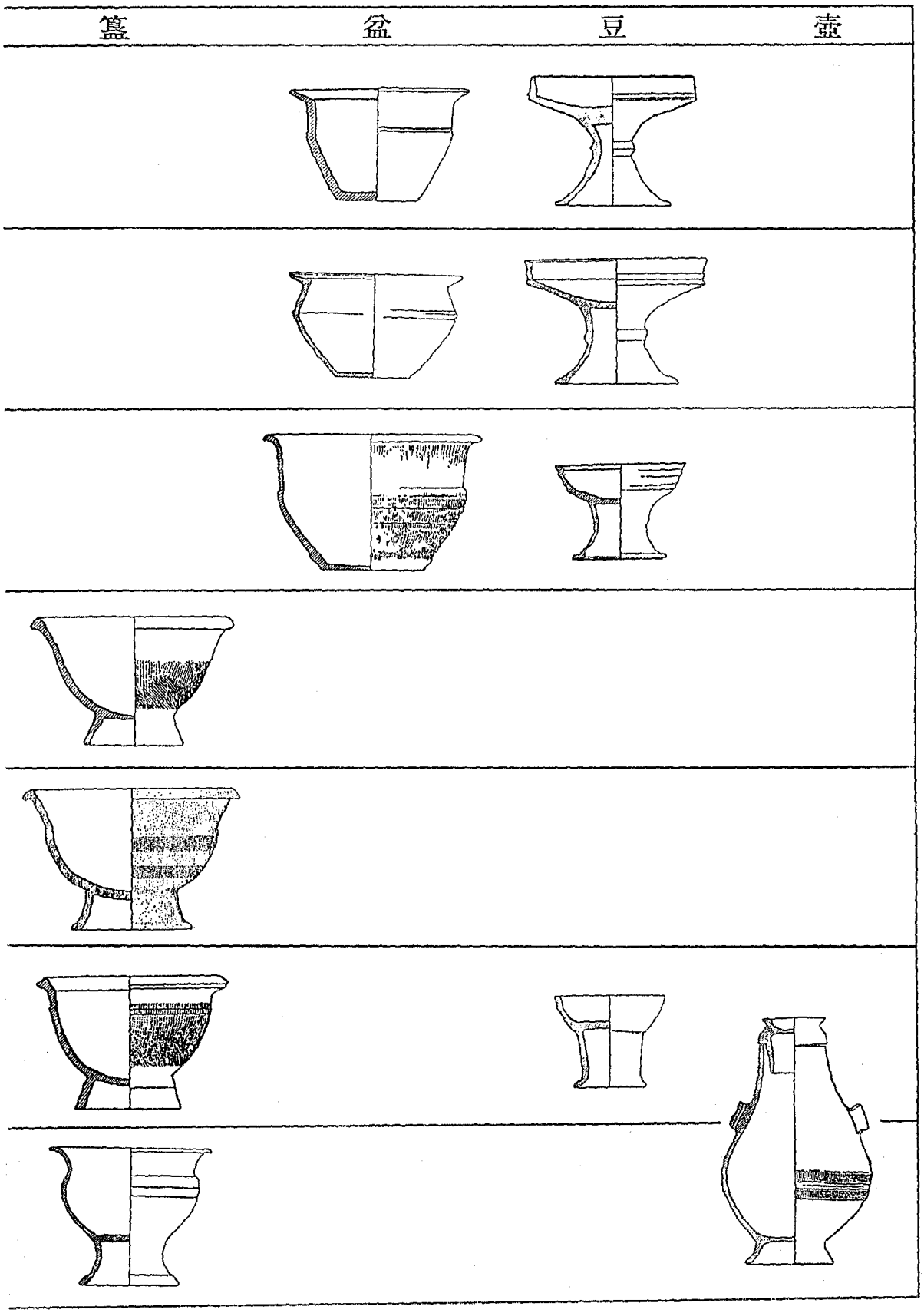
が年代の上で河南省陝県上村嶺の虢国墓地出土の土器につながるものと推定される。

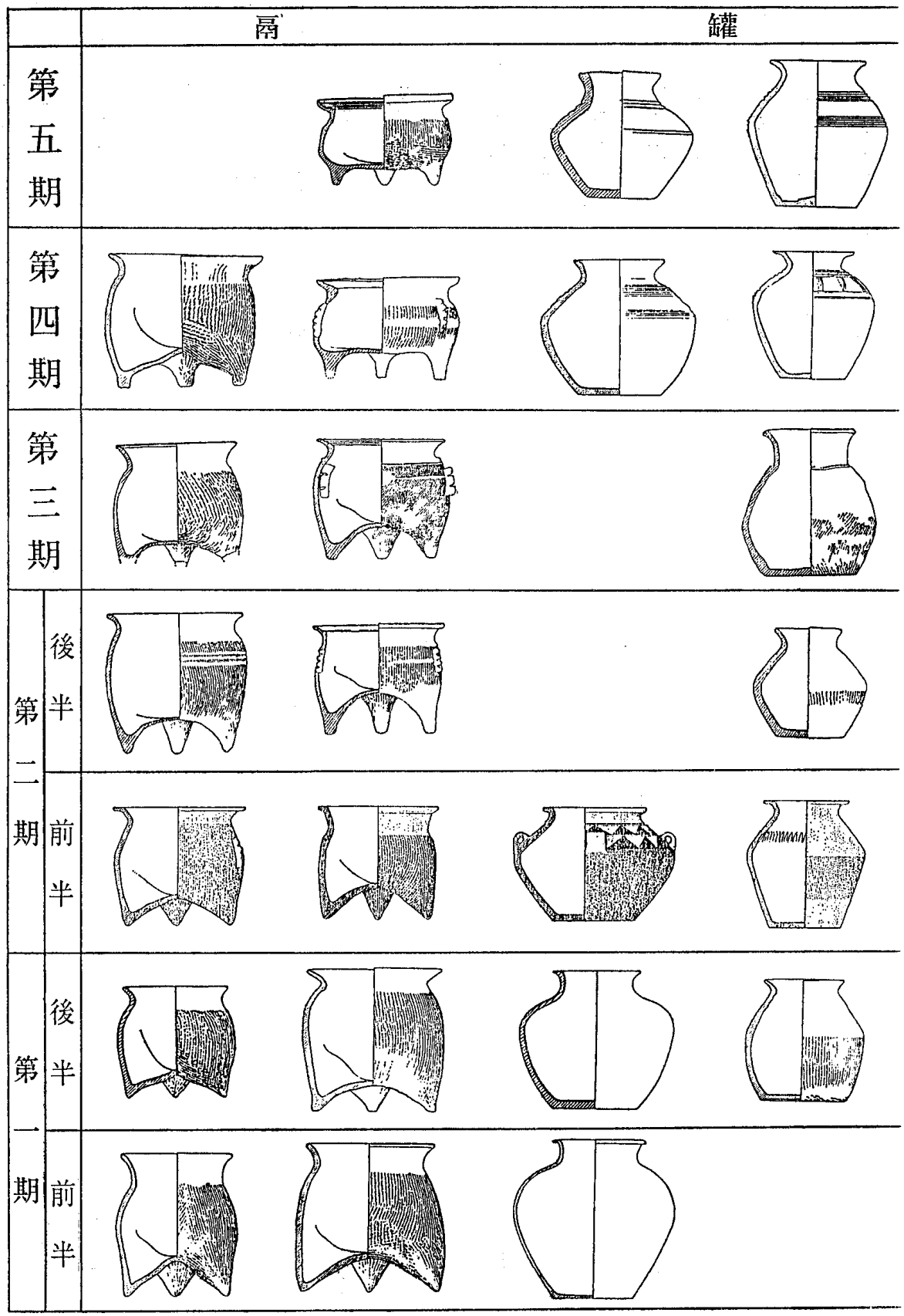
四、結　論

灃西張家坡遺跡出土の西周土器を中心に、西周土器の編年を試みた。土器の相対年代は、これまでの発掘報告によって、概ね確立していたが、それらの土器に関する相対年代は、実年代との関係において不明の点が多かった。この小論文では、西周土器に伴って出土した青銅器の年代観を元に、土器に年代を与えてみた。

銘文から得られる青銅器の年代は、土器の漠然とした年代観よりは、はるかに確実な年代を示すものといえる。銘文の無い青銅器に関しては、型式論的な作業による年代しか示す事は出来ず、この意味に於いては土器と変わり無いが、しかし、年代を示す銘文のある青銅器と銘文の無い青銅器が型式的に同一で有る場合は、土器に比べはるかに確実な年代がわかると見てよいであろう。

西周時代のおよそ二五〇年間を、五時期に分けて豐京・


簋
盆
豆
壺



第17図　西周土器編年図

鎬京地区の土器を中心に編年を行った。その結果、第一期を武王末年、成王、康王の時代、第二期を昭王、穆王の時代、第三期を共王、懿王、孝王の時代、第四期を夷王、厲王と共和の時代、第五期を宣王、幽王の時代とし、各時期の時間的長さの平均化をはかった。東洋史の面から考えるとあるいはこのような時代区分は意味がなく無謀かとも思うが、年代区分を概ね四〇年から六〇年に平均化することができ、遺物の型式学的な意味も出てくるものと考えた。

第一期は前半と後半に分けられ、第一期前半の標準となる資料は張家坡六七SCCM五四号墓と六七SCCM一六号墓である。第一期前半の土器器形には、分襠鬲、連襠鬲、鼓腹罐、簋の器形が存在し、青銅器を模倣した壺も存在する。分襠鬲、連襠鬲とも脚は比較的高く、簋の圈足も高い。第一期の後半の標準となる資料は、張家坡の五七SCCM一七八号墓や灃西六一M四〇四号墓の資料である。分襠鬲、連襠鬲、鼓腹罐、罐、簋、豆などの器形がある。豆の皿は深く、圈足は太い。

第二期も前半と後半にわかれる。第二期前半の資料には、張家坡五七M一六二号墓や扶風県雲塘遺跡の西周墓出土土器がある。先の時期に同じく分襠鬲、連襠鬲がある。鼓腹罐、罐、簋の器形もあるが、豆の類は少ない。第二期の後半は長甶墓によって代表されるが、張家坡の六七SCCM五六号墓出土の土器もこの時期の遺物である。鬲、罐、簋の器形が知られる。

第三期の土器の標準は、扶風県上康村遺跡のM二号墓、長安県張家坡遺跡の六七SCCM五七号墓出土の土器などである。土器の器形には、鬲、罐、盆の他、再び豆が出現する。豆の皿は極めて浅くなっている。

第四期の土器の標準には、鬲、広口罐、罐、盆、豆がある。張家坡新旺村M一〇四、M一〇五号墓や張家坡六七SCCM一六〇号墓出土の土器が標準となる。鬲には器身が浅く、平底に実足の付いた物が出現する。また、鬲足の先端が短い円柱状を呈する物がみられる。

第五期の土器の標準には、鬲、罐、盆、豆などがあり、張家坡六七SCCM一一五号墓、同じく一〇六号墓出土の遺物などがある。豆の器身は浅く、圈足が細く、横帯の付く物が見られる。

上記の編年を元に編年図を作図すると第一七図のごとくなる。陝西省内出土の西周土器の年代を考える上で参照になるもの

と思う。また西周時代各地の土器一般を考える上でも参考になるはずである。今後は、さらにこの編年を基礎として、洛陽付近や河北、山東の西周土器の編年を考えてみたい。

五、おわりに

以上、豐鎬地区における西周墓出土の土器に関し編年を組み立ててみた。かつて北京大学考古系の蔣祖棣氏の修士論文「論豐鎬遺址西周陶器分期」を目にする機会をえた。[43] また最近は同じく北京大学考古系の徐天進氏の山西省曲沃県曲村遺跡出土の西周土器に関する研究を耳にしている。これら北京大学考古系諸氏の研究に比べると、この筆者の研究は、情報不足の感を免れないが、最近の研究を踏まえた中国側研究者による編年表の発表を見ないので、あえてここに西周土器の編年表を発表したしだいである。本研究に当っては、一九九二年度駒澤大学特別研究助成金の援助を受けた。

註

(1) 12、蘇秉琦、一九四八。
(2) 14、中国科学院考古研究所、一九六二。
(3) 4、徐炳昶・常惠、一九三三。
(4) 6、石璋如、一九四九。
(5) 10、陝西省文物管理委員会、一九五七。
(6) 5、石興邦、一九五四。
(7) 13、中国科学院考古研究所、一九五九。
(8) 13、中国科学院考古研究所、一九五九。
(9) 16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。

(10) 28、李峰（李豐）、一九八八。
(11) 李峰氏の青銅器編年で孝王～共和に到る時代が散漫になるのは、出土資料を重んじた事によることを筆者は承知している。また李峰氏の西周青銅器の年代観に関しては、筆者はそれなりに理解でき、その根拠が銘文のある青銅器に有る事を承知している。
(12) 1、飯島武次、一九八五。
(13) 16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。また、14、中国科学院考古研究所、一九六二では張家坡遺跡の集落遺跡下層出土土器の時代名称を〝西周早期〟としている。今日の常識から言えば、豐京時代ならば〝先周〟と呼ぶべきで、また張家坡遺跡下層出土の遺物は、克殷後の遺物である可能性も高い。
(14) 8、陝西周原考古隊、一九八四。
(15) 2、飯島武次、一九八八。
(16) 16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。
(17) 19、長水、一九七二。
(18) 25、林巳奈夫、一九八四。
(19) 27、容庚、一九四一。
(20) 24、陳夢家、一九六二。
(21) 21、陳夢家、一九五五A。
(22) 26、武者章、一九八九。
(23) 26、武者章、一九八九、表1。
(24) 29、梁星彭・馮孝堂、一九六三。
(25) 16、中国社会科学院考古研究所灃西掘隊、一九八〇。
(26) 28、李峰、一九八八。
(27) 16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。
(28) 〝擧〟の族徽記号の年代については、林巳奈夫氏の解説がある。25、林巳奈夫、一九八四、『殷周時代青銅器の研究』（『殷周青銅器綜覧（一）』吉川弘文館、東京）。
(29) 25、林巳奈夫、一九八四、器種別各型の時代的型式変遷図・一型鼎、図版、一六頁。

(30) 22、陳夢家、一九五五B。
(31) 28、李峰、一九八八。15、中国科学院考古研究所灃西発掘隊、一九六二。
(32) 18、趙永福、一九八四。
(33) 14、中国科学院考古研究所、一九六二。
(34) 23、陳夢家、一九五六。
(35) 7、陝西周原考古隊、一九八〇。
(36) 7、陝西周原考古隊、一九八〇。22、陳夢家、一九五五B。
(37) 10、陝西省文物管理委員会、一九五七。
(38) 5、石興邦、一九五四。
(39) 16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。
(40) 11、陝西省文物管理委員会、一九六〇。
(41) 17、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八六。
(42) 9、陝西省考古研究所・陝西文物管理委員会・陝西省博物館、一九七九。
(43) 3、蔣祖棣、一九八六。

図出典目録

第1図 16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。
第2図 16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。
第3図 14、中国科学院考古研究所、一九六二。
第4図 14、中国科学院考古研究所、一九六二。
第5図 14、中国科学院考古研究所、一九六二。
第6図 14、中国科学院考古研究所、一九六二。
第7図 7、陝西周原考古隊、一九八〇。
第8図 10、陝西文物管理委員会、一九五七。

第9図　5、石興邦、一九五四。
第10図　16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。
第11図　11、陝西省文物管理委員会、一九六〇。
第12図　16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。
第13図　17、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八六。
第14図　16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。
第15図　16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。
第16図　16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。
第17図　16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇。14、中国科学院考古研究所、一九六二。7、陝西周原考古隊、一九八〇。

引用文献目録

1、飯島武次、一九八五、『夏殷文化の考古学研究』（山川出版社）。
2、飯島武次、一九八八、「先周文化陶器の研究……劉家遺跡出土陶器の検討」（『考古学雑誌』第七四巻第一号）。
3、蔣祖棣、一九八六、「論豐鎬遺址西周陶器分期」（『北京大学碩士研究生卒業論文』北京大学考古系、タイプ印刷）。
4、徐炳昶・常惠、一九三三、「陝西調査古跡報告」（『国立北平研究院院務彙報』第四巻第六期）。
5、石興邦、一九五四、「長安普渡村西周墓葬発掘記」（『考古学報』第八冊）。
6、石璋如、一九四九、「伝説中周都的実地考察」（『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』第二〇本下冊）。
7、陝西周原考古隊、一九八〇、「扶風雲塘西周墓」（『文物』一九八〇年第四期）。
8、陝西周原考古隊、一九八四、「扶風劉家姜戎墓葬発掘簡報」（『文物』一九八四年第七期）。
9、陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、一九七九、『陝西出土商周青銅器（一）』（北京）。
10、陝西省文物管理委員会、一九五七、「長安普渡村西周墓的発掘」（『考古学報』一九五七年第一期）。
11、陝西省文物管理委員会、一九六〇、「陝西岐山、扶風周墓清理記」（『考古』一九六〇年第八期）。
12、蘇秉琦、一九四八、『闘鶏台溝東区墓葬』（『国立北平研究院中央研究所陝西考古発掘報告』第一種第一号）。
13、中国科学院考古研究所、一九五九、『上村嶺虢国墓地』（『中国田野考古報告集』考古学専刊丁種第一〇号）。

14、中国科学院考古研究所、一九六二、『灃西発掘報告』（『中国田野考古報告集』考古学専刊丁種第一二号）。
15、中国科学院考古研究所灃西発掘隊、一九六二、「一九六〇年秋陝西長安張家坡発掘簡報」（『考古』一九六二年第一期）。
16、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八〇、「一九六七年長安張家坡西周墓葬的発掘」（『考古学報』一九八〇年第四期）。
17、中国社会科学院考古研究所灃西発掘隊、一九八六、「一九七九～一九八一年長安灃西、灃東発掘簡報」（『考古』一九八六年第三期）。
18、趙永福、一九八四、「一九六一～六二年灃西発掘簡報」（『考古』一九八四年第九期）。
19、長水、一九七二、「岐山賀家村出土的西周銅器」（『文物』一九七二年第六期）。
20、張長寿・梁星彭、一九八九、「関中先周青銅器文化的類型与周文化的淵源」（『考古学報』一九八九年第一期）。
21、陳夢家、一九五五A、「西周銅器断代（一）」（『考古学報』第九冊）。
22、陳夢家、一九五五B、「西周銅器断代（二）」（『考古学報』第一〇冊）。
23、陳夢家、一九五六、「西周銅器断代（三）」（『考古学報』一九五六年第一期）。
24、陳夢家、一九六二、『美帝国主義劫掠的我国殷周銅器集録』（北京）。
25、林巳奈夫、一九八四、『殷周時代青銅器の研究』（『殷周青銅器綜覧（一）』吉川弘文館、東京）。
26、武者章、一九八九、「先周青銅器試探」（『東洋文化研究所紀要』第一〇九冊）。
27、容庚、一九四一、『商周彝器通考』（『燕京学報』専号之十七、北京）。
28、李峰（李豐）、一九八八、「黄河流域西周墓葬出土青銅礼器的分期与年代」（『考古学報』一九八八年第四期）。
29、梁星彭・馮孝堂、一九六三、「陝西長安・扶風出土西周銅器」（『考古』一九六三年第八期）。